論　文

バークとマルサスにおける階層秩序と経済循環

——「存在の連鎖」受容の一断面——*

中　澤　信　彦**

要　約

ラヴジョイは、『存在の大いなる連鎖』において、ヨーロッパ思想史上、プラトン以来の主要な観念図式として「存在の連鎖」を抽出し、ヨーロッパの自然・社会認識のあり様を特色づけた。神によって個別に創造されたすべての種（生物・無生物）は、最も高等なもの（天使）から最も下等で原始的なもの（鉱物）にいたるまで、「欠けている環」のない単線的な階層秩序を形成している、という世界観をこの観念図式は含意しており、18世紀に空前絶後の普及を達成していた。詩人ポープは哲学詩『人間論』でこうした世界観を典型的に表現した。本稿は、バークとマルサスのデビュー作がともに『人間論』からの引用を含んでいる事実を出発点として、両者における政治的保守主義と経済的自由主義の結合の知的起源を「存在の連鎖」の観念図式およびその変容（時間化）に求め、英国近代保守主義が啓蒙思想に対する反動的側面ばかりでなく啓蒙思想の「末子」あるいは「一ヴァリアント」としての進歩的側面（漸進的改革論）も有することを明らかにする。

キーワード：バーク；マルサス；ポープ；存在の連鎖；時間化；欠けている環；啓蒙；フランス革命；保守主義；自由主義；保守的自由主義；階層秩序；経済循環；不生産的消費；奢侈的消費；有効需要；目的論；進化論；ダーウィニズム

経済学文献季報分類番号：01-21；01-23；03-22；03-43

---

*　本稿は2004-6年度科学研究費補助金——基盤研究（A）（1）「近代イングランドとその近隣英語圏における啓蒙思想と経済学形成の関連の研究」（課題番号：16203013、研究代表者：田中秀夫）——および関西大学2006年度研修員による研究成果の一部である。なお、本稿はこれまでに6回の下報告（2004年9月方法論研究会、2004年10月社会思想史学会セッション「自由主義思想の射程」、2005年8月経済学史研究会、2005年12月日本イギリス哲学会関西部会、2006年9月京阪経済研究会、2006年10月社会思想史学会自由論題）を行なった。田中秀夫氏、橋本昭一氏、生越利昭氏、深貝保則氏、原田哲史氏、小田川大典氏、伊藤誠一郎氏、藤本正富氏をはじめとする多くの方々から有益なコメントを賜った。また資料入手に際して森岡邦泰氏、太子堂正称氏、上宮智之氏、山根聡之氏の助力を賜った。ここに記して感謝の意を表明したい。

**　関西大学経済学部助教授

E-MAIL: nakazawa@ipcku.kansai-u.ac.jp

URL: http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~nakazawa

いかに全能でも、偉大な創造者にとってさえ、その崇高な目的に適うような高い質の精神を持った人間を作るためには、一定の過程が必要であり、また一定の時間（少なくとも我々には時間と思われるもの）も必要である、と我々は結論すべきではないのか？――マルサス[1)]

はじめに――反啓蒙と経済学――

啓蒙（英 enlightenment; 仏 lumières; 独 Aufklärung）の原義は「（暗黒の世界を）明るく照らす」である。カントは、論文「啓蒙とは何か」において、啓蒙を「人間が自分の未成年状態から抜け出ること」[2)]と定義し、偏見・因習・伝統的権威にとらわれずに自分の頭で自由に思考することの重要性を説いた。彼は「宗教における未成年状態こそ最も有害であると同時に最も恥ずべきもの」[3)]と断言している。宗教的迷蒙（暗黒の世界）から人間を解放することが、国・地域によって濃淡の差こそあれ、啓蒙一般の課題であったことは確かである。しかし、このことはキリスト教信仰が啓蒙思想と真っ向から敵対しており教会関係者がおしなべて保守反動勢力であったことを意味するわけではない。

神の御言葉を記録した聖書を読み解くように神の御業である「自然という書物」を読み解こうとする「自然神学」の手法[4)]が、ニュートン力学に代表される近代自然科学の形成において導きの糸となったことは、もはや常識の部類に属する。スウェーデンの博物学者リンネ（Carl von Linne, 1707-78）に典型的に見られるように、博物学もまた、神の秩序そのままの「自然の体系（system of nature）」を見いだし、神の偉大さを賛美したい、という宗教的情熱に支えられていた[5)]。また、英国において奴隷貿易・奴隷制度の廃止運動を主として指導したのは、国教会の福音派とクェーカー教徒であった[6)]。つまり、啓蒙思想の展開を（伝統的啓示宗教に代表される）偏見・因習・伝統的権威の解体過程としてのみ捉えることは、過度に単純化された理解だと言える。そうであるならば、「啓蒙思想と経済学形成の関連」を研究課題とする我々は、伝統的な身分制社会への形而上学的信仰がバネになって逆説的に高度な経済認識――近代的な新しい学としての経済学――を生み出す可能性についても、検討を進めなければならない。

1）*WM*, I, p.122（マルサス［1935］202ページ）.（　）はマルサスによる挿入。以下、すべての引用文において、邦訳のあるものについてはページ数を明記したが、訳文は必ずしも従っていない。

2）カント［1974］7ページ。

3）カント［1974］18ページ。

4）鷲津［2005］。

5）松永［1992］第4章。

6）Porter［2001］p.62（邦訳99ページ）.

そこで本稿では、英国保守主義の父祖バーク（Edmund Burke, 1729-97）――彼は社会統合の基盤として国教会制度の堅持を説いた――と「二番打者」[7] マルサス（Thomas Robert Malthus, 1766-1834）――彼自身が国教会の牧師であった――における「存在の連鎖」の観念図式の受容の様相を追跡することによって、両者における政治的保守主義と経済的自由主義との知られざる結合の構造を明らかにしたい。

I　問題設定――ポープ、バーク、マルサスと「存在の連鎖」――

そもそも「存在の連鎖」とは何か？　なぜ「存在の連鎖」が注目に値するのか？　ラヴジョイ（Arthur O. Lovejoy, 1873-1962）は、『存在の大いなる連鎖』（1936）において、ヨーロッパ思想史上、プラトン『国家』『ティマイオス』以来の主要な観念図式――個人や集団の思考の中に無意識に作用している暗黙の前提や無自覚的な精神的習慣――として「存在の連鎖」を抽出し、ヨーロッパの自然・社会認識のあり様を特色づけた。「存在の連鎖」とは、神によって個別に創造されたすべての種（生物・無生物）は、最も高等なもの（天使）から最も下等で原始的なもの（鉱物）にいたるまで、「欠けている環（ミッシング・リンク）」のない単線的な階層秩序を形成しているとする信念、存在了解、分類学上のシステムのことである[8]。この観念図式は進化論が登場する直前の18世紀において空前絶後の普及を達成していた[9]。リンネが自分の弟子たちを世界中に派遣し、標本を送り届けさせたのも、「欠けている環」は探せば必ず見つかるはず、という強固な信念に突き動かされてのことであった[10]。

「存在の連鎖」は自然認識のみならず社会認識に対しても強大な影響力を誇った。本来、この観念図式はきわめて静的・固定的な階層秩序観を含意・前提しており、その考え方が人間社会の内部に適用された場合には、「社会的階級の存在を是認するイデオロギー」となった。すなわち、その秩序とは「神によって創造された不変の存在たちがそのなかでそれぞれの固定した地位を維持しつづけている、永遠に変わることのない静的な秩序」であり（図１）、それゆえ、「人間が宇宙的秩序において自分より上位の存在の属性を求めたり、上位の存在

7）水田［1976］193ページ。

8）それゆえ、「存在の連鎖」にあっては、魚と人間のあいだに人魚、鳥とヘビのあいだにバジリスク、といった中間的形態を有する幻獣たちも存在しなければならない、ということになる。「万が一にも、人魚なんぞ伝説の生きものだ、ということになれば、このシステムはもろくも崩壊する。そこで人魚は、当時の博物学の安寧のためにもことさら探しだされねばならぬ生物だったのだ」（別冊宝島編集部（編）［1990］30-1ページ）。Lovejoy［1936］p.236（邦訳250ページ）も見よ。

9）この観念図式のルネサンス期英国における様態については、Tillyard［1943］を見よ。

10）18世紀博物学と「存在の連鎖」との関連については、ロジェ［1992］第６章も参照せよ。博物学的欲望が人種差別のイデオロギーへと転化していく経緯については、弓削［2004］が簡便なガイドの役割を果たす。

図1　ディダクス・ウァラデス『キリスト教的修辞学』（1579）所収

の特徴的な行動を模倣したりするのは、自分よりも下位の段階に下ることと同様に不道徳」と見なされるわけである[11)]。

したがって、「存在の連鎖」が伝統的な身分制社会を堅持しようとする保守的な社会観と密接な関係を有していることは確かである。とはいえ、「なぜバークとマルサスを二つながらにとりあげるのか？」という疑問が依然として残るかもしれない。こうした疑問は、以下に指摘するような文献上の興味深い符合によって、かなりの程度解消されるように思われる。その符合とは、管見のかぎりこれまでまったく注目されなかった符合なのだが、両者のデビュー作であるバーク『自然社会の擁護』（1756）とマルサス『人口論』（1798）がともに末尾近くにアレクサンダー・ポープ（Alexander Pope, 1688-1744）の哲学詩『人間論』[12)]

11）丹治［1994］9-10ページ。Lovejoy［1936］lecture 6, Dickinson［1977］p.8（邦訳17ページ）, Nisbet［1986］p.36, 51（邦訳53、73ページ）, Cannon［1994］pp.159-63, 半澤［2003］33-8ページも見よ。

12）『人間論』は、ボーリングブルック卿に宛てられた書簡体の哲学詩で、全体で4つの書簡からなる。完全なタイトルは『人間論――ボーリングブルック卿ヘンリ・セント・ジョン宛の4書簡詩――』。人間の性質や状態を、宇宙（第1書簡）・自己（第2書簡）・社会（第3書簡）・倫理（第4書簡）との関係から考察している。その概要は以下の通り。↗

――ライプニッツ（Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646-1716）の有名な格言「自然は飛躍しない（Natura non facit saltum）」と並んで、「西洋の思想史全体をほとんどつらぬいているその観念の、もっとも典型的な表現となりえている」[13] と評される――からの引用を含んでいることである。

『自然社会の擁護――あらゆる種類の人為社会が人類にもたらす悲惨と害悪についての一見解、亡き貴族から＊＊＊＊卿への手紙――』は、ボーリングブルック（Henry St. John, 1 st Viscount Bolingbroke, 1678-1751）流の宗教思想（理神論）が文明社会に及ぼす危険性を風刺的に告発した作品である[14]。バークは、ボーリングブルックの文体を巧みに模倣するこ

↘【第1書簡】 万物は、いわゆる「存在の大いなる連鎖」として、秩序をなして存在している。その鎖は一つとして欠けるところがなく、全体が一定の秩序をなして並べられている。その連鎖において人間は、神と獣の中間の、中途半端で不完全な位置を占めている。慢心した人間は時としてその本分を忘れて人間以上の存在になろうとするが、そうやって存在の連鎖の外に飛び出そうとすれば、連鎖に欠損が生じて、全体の秩序が一瞬にして崩壊してしまう。つまり、人間の不幸の原因はその高慢さにある。裏を返せば、摂理を信じて既存の秩序に従うことに、人間の義務はあり、幸福もある。

【第2書簡】 人間は自愛と理性の二つの原理に支配されている。前者は人間を行動へと駆り立て、後者はその行動の行きすぎを制御する。前者が悪徳の源で後者が美徳の源なのではない。美徳も悪徳もその源は自愛である。悪徳と紙一重の美徳を歪曲させないように保護するのが理性の役目である。

【第3書簡】 全宇宙は一つの社会組織である。単独に存在するものは一つもない。すべてが相互に依存しあっている。あらゆる社会的結合の基礎は、人間にも禽獣にも本能として自然に備わっている自愛と社会愛である。愛から真の宗教と統治が生まれるのに対して、恐怖から迷信と暴政が生まれる。

【第4書簡】 第1書簡でも論じられたように、秩序は神の第一法則であり、それゆえ人間に大小、貧富、賢愚のあるのは当然である。しかし、この事実だけを見て人間の禍福を論じてはならない。幸福こそがわれわれ人間の存在の究極の目的であるが、幸福は外面的な利益に依存していない。幸福とは有徳さの報酬なのであって、有徳であるためには、正しく考え善意を持つだけで足りるが、そのために必要な健全な判断力は、身分にかかわりなく、すべての人間に等しく与えられている。善行は常に神の酬いを受ける。幸福でありたいという願望は、他者を助ける最も強い動機と結びついている。個人の見いだす幸福で、多かれ少なかれ、人類全体を利する方向をもたないものはない。というのも、真の自愛と真の社会愛とは同一であるからだ。

13）丹治［1994］8ページ。実際『人間論』第4書簡には以下のような一節が見られる。まさしく「存在の連鎖」の観念図式の典型的表現である。*PPP*, pp.128-9（ポウプ［1950］30-1ページ）.

存在の大いなる連鎖！　それは神より始まり、
天上、地上、天使、人間、
獣、鳥、魚、虫、目に見えぬもの、
望遠鏡のとどかぬもの、無限から汝へ、
汝から無へと続く―より優れたものに
我々が迫れば、より劣ったものが我々に迫る。
さもないと、被造物全体の中に間隙が生じて、
階段の一段が折れても、大いなる階段は崩れ落ちよう。

14）ただし『擁護』は、理神論に対する風刺物語としてのみならず、若きバークの政治的急進主義への理解と（やや屈折した）共感の証左としても読むことができる。『擁護』本文の主張内容のすべてを↗

とによって、『擁護』を『ボーリングブルック著作集』（1754）の収録から洩れた遺作に見せかけた。その模倣の才は、当時の著名な文人たちまでもが『擁護』をボーリングブルックの作品だと思い込むほど高いものであった。（似非ボーリングブルックである）「亡き貴族」は文明社会の害悪を次のように告発している。太字ゴチック部分が『人間論』からの引用である。

貧乏人は過度の労働により、金持は法外な奢侈によって、同一の水準におかれ、自分たちの幸福に役立つかもしれぬどんな知識についても、同じように無知にされてしまう。これが、全文明社会の、内部の陰鬱な情景だ。…。

閣下、あなたの政治家が、現在の不平等な状態は非常に有益なのだと弁明するであろうことを、私は気づいている[15]。人類のある部分が、非常な労苦に従事するよう運命づけられることなしには、生活を文明化する技芸（アーツ）を使うことはできないのだ、と言うであろう。しかし、私はこの政治家に、どうしてこのような技芸が必要になったかを問いただす。…私は、これらの技芸とその原因についての私の感情を、すべての友人としばしば論じてきた。ポープは、自然状態を讃美したりっぱな詩のなかで、非常に力強い理性と優雅な言葉によってこの感情を表現している。

そこには高慢さはなく、高慢さを助長する技芸もなかった。
人間は獣とともに歩き、木陰を分かち合った[16]。

他方、『人口論』初版の正式なタイトルは『人口原理に関する一論――ゴドウィン氏、コンドルセ氏、その他の著述家たちの諸説を論評しつつ、人口原理が社会の将来の改善に及ぼ

↘バークが退けたと考えることはできない。中澤［1996］［1997a］はこうした新しい読解の可能性を探っている。

15）後（1760年）にジョージ3世として即位する皇太孫ジョージは、スコットランド人でトーリのビュート伯を家庭教師として寵愛し、彼からボーリングブルックの著書『愛国王の理念』にもとづく君主教育を受けていた。『擁護』が公刊された1756年は成人となった皇太孫の側近人事が政治問題化していた。皇太孫はビュートの任命を求めたのに対して、祖父ジョージ2世はこの人事を認めようとしなかった。したがって、「閣下」たる「＊＊＊＊卿」は皇太孫ジョージ（後のジョージ3世）を指し、「あなたの政治家」はビュート伯を指すと推測される。

16）*WSB*, I, pp.180-1（バーク［1969］400-1ページ）.『人間論』からの引用は、Pope［1969］p.142（ポウプ［1950］69ページ）. バークは‘Pride then was not …’と引用すべきところを誤って‘Then was not Pride …’と引用している。なお、邦訳（水田珠枝訳）では人名である「（アレクサンダー・）ポープ」が「法王」と誤訳されている（バーク［1969］387ページ）。バークはデビュー第2作『崇高と美の観念の起源』（1757）、最晩年の著作『ある貴族への手紙』（1796）においても、『人間論』から引用している。*WSB*, I, p.282（バーク［1999］138ページ）. *WSB*, IX, p.181（バーク［2000］843ページ）.

す影響を論じる――』である[17]。副題から推測できるように、『人口論』の主題は、フランス革命の理想に刺激されたゴドウィン（William Godwin, 1756-1836）とコンドルセ（Marie Jean Antoine Nicolas Caritat, marquis de Condorcet, 1743 -94）のユートピア思想および私有財産制批判を論駁することであった。マルサスによれば、貧困や悪徳は社会制度ではなく自然法則（人口法則）にもとづくのであって、仮に理想的な平等社会ができたとしても――フランス革命はこのような平等社会を目指しているようだが――、やがて人口が急増して食料不足となり、平等社会は必然的に崩壊する。しかし悲観的に考えてはならない。貧困や悪徳をこの世から一掃することは不可能であるけれども、その発生率を引き下げることは可能である。貧困や悪徳がこの世に存在するのは失望ではなく希望と活動を生み出すためである。太字ゴチック部分が『人間論』からの引用である。

> もし害悪の量が人間の活動あるいは怠惰ともに減少もしくは増大しなければ、それは活動への刺激としてあまり強力に作用しないであろう。この圧力の重量と配分とにおける継続的変化は、それを除去する不断の期待を衰えさせないでおくのである。
>
> **希望は湧き出る、永遠に人間の胸のなかに。**
>
> **人間は今祝福されずとも、必ず将来祝福されることになっている**[18]。

ヨーロッパ思想史上『人間論』が占める特殊な位置――「存在の連鎖」の観念図式の「もっとも典型的な表現」――を考慮するならば、バークとマルサスのデビュー作がともに同書からの引用を含んでいることは、若きバークとマルサスがともに『人間論』の議論に通じていたことの証左であり、両者の社会観が「存在の連鎖」の観念図式の影響下に成立したことを予感させるものである。こうした予感は、英国保守主義の成立に関して、フランス革命と産業革命の衝撃を強調する通説的理解[19]とは異なる理解の可能性を含んでいる。本稿

17）第二版から副題は「人口原理が人間の幸福に及ぼす過去および現在の影響を概観し、当原理に起因する諸害悪が将来除去されうるかどうかの見込みを検討する」へと変更された。

18）*WM*, I, p.137（マルサス［1935］222-3ページ）.『人間論』からの引用は、Pope［1969］p.125（ポウプ［1950］21ページ）.

19）「近代保守主義の思想と運動とが政治社会における大きな潮流へと成長するためには、革命のイデオロギーが有力な社会集団によって担われ、そして既存の体制に鋭い挑戦をつきつけ、それを根底から動揺させるほどに深刻な危険を示すような事態があらわれるのを必要とする。近代ヨーロッパの歴史において、こうした保守主義の発生要因がはじめて出現したのは、フランス革命と産業革命との衝撃によって既存の政治体制と社会構造と価値体系とが根本的に動揺した18世紀末から19世紀初頭にかけてであり、まさにこの時代に近代保守主義の父祖エドマンド・バークが思索し、そして「保守主義の宣言」と呼ばれる『フランス革命の省察』が書かれたのである」（勝田［1969］168-9ページ）。

は通説的理解に対して「フランス革命と産業革命の衝撃は触媒にすぎなかったのではないか？」「もっと本質的な何かが啓蒙の18世紀を通じて熟成されていたのではないか？」との疑問を対置する。つまり、啓蒙思想への「反動」としてではなくその「末子」あるいは「一ヴァリアント」として近代保守主義の成立を捉えたいわけである。そのような分析視角を採用してはじめて、単なる保守反動から区別された政治哲学としての保守主義が――後述するように――経済的自由主義や漸進的改革主義を自身の内に含みうるゆえんを説明できるように思われる。

管見のかぎりでは、バークとマルサスをふたつながらに「存在の連鎖」という観点から比較した先行研究は存在しないが、バークと「存在の連鎖」との関連については、アイザック・クラムニックの断片的ではあるが先駆的な指摘が知られている。クラムニックはバークを「存在の連鎖を強調する最後の偉大な英国人理論家」[20] と評しているが、「存在の連鎖」とバークの政治思想（政治的保守主義）との関連について語っても、彼の経済思想（経済的自由主義）[21] との関連について何も語っていない。また、「最後」という表現から伺えるように、「存在の連鎖」の観念図式がいかにしてバーク以降の思想家へ継承されたのかという問題を明示的に取り上げていない。他方、ジェイコブ・ヴァイナーは、「経済的不平等を正当化するために存在の連鎖の教義を使用した18世紀の経済学者として私の見つけたのは、聖職者であると同時に経済学者でもあった、グロスター大聖堂の首席司祭ジョサイア・タッカーだけ（only）である」[22] と断じているが、バークの経済思想と「存在の連鎖」との関連への着目は、この「だけ」という限定辞の妥当性の問い直しを要請している。「経済的不平等を正当化するために存在の連鎖の理論を使用した18世紀の経済学者」としての地位は、タッカーのみならずバークにも与えられうるかもしれない。

次節以下では、「存在の連鎖」の観念図式がバークとマルサスの社会観および経済認識に及ぼした影響を、ポープ『人間論』との関係に留意しつつ、また、クラムニックの指摘を導きの糸としつつ――彼の見解を乗り越える形で――追跡したい。

II　バークにおける階層秩序と経済循環

有機的組織としての国家の強調は、バークと彼以後の保守主義政治原理の特徴の一つであるとしばしば論じられるが、とりわけバークにおいては、すでに確立している慣習への敬

20）Kramnick［1977］p.183. 同書 pp.29, 34-38, 83、Kramnick［1990］pp.2-18, 289-95も参照せよ。

21）バークは、『穀物不足に関する思索と詳論』（1795）において、凶作時においても穀物取引における徹底的なレッセ・フェールを主張した。中澤［1997b］を参照せよ。

22）Viner［1972］p.92（邦訳124-5ページ）.

意、自分が帰属している（家族・地域社会・教会などの）媒介的中間集団への愛着――バーク自身の用語では「偏見（プレジュディス）」――が、個人の内面に道徳性・公共性を育み、それが社会統合の基盤をなす、と考えられている。以下に引用する『フランス革命の省察』（1790）からの一節は、このようなバーク思想の特徴の典型的な表現であるが、ここにはポープ『人間論』の第4書簡からの明白な影響が看取される。

> 社会の中で自分が属している小さな一画に愛着を持つこと、その小さな一隊を愛することは、公的愛情の第一の動機（言うなれば萌芽）です。それこそ、我々を導いて、祖国愛からひいては人類愛へと進ませる長い連鎖の最初の輪（the first link in the series）なのです[23]。

また、『省察』に次ぐバークの主著『新ウィッグから旧ウィッグへの上訴』（1791）には、「存在の連鎖」の世界像――万物は創造者たる神の支配を受け、神が設けた普遍的な階層秩序に属するのであり、あてがわれた地位の本分を守らねばならない――が、次のようにはっきりと表明されている。

> 我々の存在の畏れ多い創造者は、存在秩序（the order of existence）における我々の場所の創造者であり、神聖な戦術によって、我々の意思ではなく彼自身の意思に基づいて、我々を整列させ進軍させるがゆえに、この配列によって、実質上我々にあてがわれた場所に帰属する役割を我々が果たすように定めたわけである。我々が全人類に負う義務は、断じて何らかの特殊な意思的契約（any special voluntary pact）の結果ではない。それは人間と人間の間の、そして人間と神との関係に由来するのであって、この関係は決して選択の産物ではない[24]。

23）*WSB*, VIII, pp.97-8（バーク［1978］60ページ）.（　）による挿入はバーク。『人間論』第4書簡には以下のような一節が見られる。*PPP*, pp.156-7（ポウプ［1950］107ページ）.

神はまず全体を愛して、部分に及ぶが、人間の心は
まず個を愛して、全体に高まらねばならない。
自愛は有徳の心を覚醒するのに役だつのだ。
例えるならば小さな石が静かな池に落ちて、
まず中心が動き、一つの狭い輪がそれに続き、
幾つもの輪が次第に広がるのに似ている。
友人、両親、隣人をまず抱擁し、
ついで祖国を、続いて全人類を。

24）*FR*, p.160（バーク［2000］655ページ）.

バジル・ウィリーは、この一画を引用しつつ、「バークは、誰しも認めるようにはるかに優れた歴史感覚と一段と強化された想像力をもってであるが、［ポープ『人間論』の］「何にもあれ存在するものはすべて是なり」という見地へ立ち戻っているかにみえる」[25] と論じており、クラムニックはこの一節をもって「神聖なる存在の連鎖とその不変で断固とした階層的な理想をバークが最も明確かつ明瞭に表明したもの」[26] と評している。次の『穀物不足に関する思索と詳論』（1795）からの一節には、このようなバークの階層秩序観がより詳細に表明されている。農業経営者（ファーマー）は、

> 彼の仕事（トレード）に用いられるすべての道具のうち、人間の労働――古代の著述家たちが有声の道具（*instrumentum vocale*）と呼んだもの――は、資本（キャピタル）から償還（リペイメント）を得ようとする時、最も信頼できるものである。他の二種類の道具、すなわち古代の分類で半声の道具（*semivocale*）と呼ばれているもの――使役用家畜――と無声の道具（*instrumentum mutum*）――荷車・犂・スコップなど――は、すべてそれ自体とるにたらないものというわけではないが、効用ないし経費の点で、比べものにならないくらい劣っている。それらは、第一の道具が一定量存在しなければ、無に等しい。というのは、何ごとにもよらずあらゆるもののうち、精神（マインド）がもっとも価値があり、もっとも重要であるからである。これを基準にするならば、農業はその全体が自然で正しい秩序（a natural and just order）にしたがっている。家畜は、犂や荷車にとって、動因となる原理（an informing principle）である。労働者（レイバラー）は家畜にとって理性（リーズン）である。農業経営者は、労働者にとって、考え指示する原理（a thinking and presiding principle）である。この従属の連鎖（chain of subordination）をたち切る試みは、それがどの部分の切断を目指すにせよ、等しく不合理である…[27]。

この引用は「存在の連鎖」の観念図式に胚胎する二面性を表面化させている。前節で述べたように、この観念図式が本来前提としたのは万物間の歴然たる静的な階層秩序であって、人間を獣より上位に、天使より下位に位置づけるものであった。しかし同時に、この観念図式は、連鎖に切れ目がなく人間と動物とを区別する境界線は極度に曖昧だということも含意していた。「獣は理性を持たない」とは考えられず、「獣も（人間の理性よりも劣るけれども）ある種の理性を持つ」と考えられた[28]。ポープ『人間論』が、「自然状態」で「**人間は**

25）Willey［1940］p.244（邦訳275ページ）.［　］は中澤による挿入。

26）Kramnick［1977］p.35.

27）*WSB*, IX, p.125（バーク［1957］251ページ）.

28）Thomas［1983］p.124（邦訳182ページ）.

獣とともに歩き、木陰を分かち合った」[29] と詠じることができた――『自然社会の擁護』に引用された一節――のも、こうした「境界線の曖昧さ」の表出として理解されるべきであろう。それゆえにこそ、農業経営者が農業労働者にとって「考え指示する原理」であり、農業労働者が家畜にとって「理性」であるのと同様に、家畜は農具にとっての「動因となる原理」であるとされる。しかし、バークは「農具は家畜に仕えるために造られており、家畜は農業労働者に仕えるために、農業労働者は農業経営者に仕えるために造られている」と主張しているわけではないように思われる。ラヴジョイによれば、「存在の連鎖の全部の環」は「他の環のためにではなく、それ自身のために、もっと正確には形態の連続が完結するために存在する」[30]。したがって、被造物はすべて全体の秩序――後述――の維持のために存在している、というのがバークの本懐であるだろう。ともあれ、バークの考えにおいては、自然は本質的に不平等であり、あらゆるものの位置・序列が理性の有無・多寡によってあらかじめ定められており、《農業経営者―農業労働者―家畜―農具》という序列は「自然で正しい秩序」であり、「この従属の連鎖をたち切る試みは…不合理」ということになる[31]。

ここでバークは、農業経営者と農業労働者との関係が支配・従属関係であることを、「存在の連鎖」の観念図式に依拠して認めつつも、それが支配・従属関係であるがゆえに「自然の正しい秩序」である、という一見逆説的な結論を導いている。それはバークが支配・従属関係という表層の内奥に互恵的で相補的な関係――「隷属なしの従属（subordination without subservience）」[32] ――を見ているからである。同じく『穀物不足に関する思索と詳論』からの引用。

> 農業労働者の生産物によって、農業経営者が十分な利潤（incoming profit）を得ることが、農業労働者の第一かつ基本的な利益である。…恵み深く賢明な万物の配置者は、人々が彼ら自身の利己的な利益を追求するに際して、彼らが意図しているかどう

29）*PPP*, pp.142（ポウプ［1950］69ページ）.

30）Lovejoy［1936］p.186（邦訳194ページ）.

31）Macpherson［1980］の邦訳の訳者解説、151ページ。

32）「なるほど従属は不可欠であったがそれは隷属なしの従属であった。我々が見た通り、どんな被造物の存在も単に梯子の上で上位にあるものの幸福のための手段ではなかった。各々は独立の存在理由を持っていた。結局はどれも皆同じく重要であった。それゆえ各々は上位のものより尊敬と思いやりを受ける権利と、自分自身の生活を送ったり、その地位にふさわしい「権利と心づけ（privileges and perquisites）」を得たり、機能を果たしたりするのに必要であろうものすべてを所有する権利を持っていた」（Lovejoy［1936］p.207（邦訳218-9ページ））。ラヴジョイは無自覚であろうが、ここには「存在の連鎖」と貧民の「モラル・エコノミー」との密接な関連が示唆されている。モラル・エコノミーについては、Thompson［1991］ch.4, 近藤［1993］、音無［1998］、中澤［1999］などを参照されたい。

かにかかわらず、一般的利益を彼ら自身の個人的成功と結びつけざるをえなくさせる[33]。…しかし、もし農業経営者が貪欲すぎればどうか？　事態はますます良いのだ。彼は、自分の収益を増やそうと望めば望むほど、自分の収益の主たる源泉に他ならない労働の提供者たちの条件を良くすることに、それだけますます関心を寄せるのである[34]。

支配・従属関係こそが人間社会全体の秩序と道徳性と経済的繁栄の源泉である。（神や天使と比べれば）卑小な人間の理性だけをもってしては理解できないだろうが、神はそのように世界をデザインした。このようなバークの社会観は、『省察』の次の一節において、いっそう明確に表明されている。

すべて繁栄している共同社会においては、生産者の生活を直接支えるに足る以上の幾分かが生産されています。この剰余は土地資本家（landed capitalist）の所得となっています。それは労働することの無い所有者によって費消されるわけですが、しかし、この怠惰はそれ自身労働の源泉であり、この休息はそれ自身勤勉（インダストリ）に対する拍車なのです。国家にとっては唯一の関心事は、土地から地代として取られた資本（キャピタル）が、その出発点たる勤勉に再び還ることであり、またその費消が、費消する人々、及びその還流先たる民衆の道徳性をできるだけ損なわないことです。

…修道士は怠惰であると言われます。そうかも知れません。彼らは聖歌隊で歌わせる以外に使い途が無いかもしれません。それでも彼らは、歌いも語りもしない人間共と同程度には有益に使われている訳ですし、舞台の上で歌う人間と比較してさえ同じ程有益に使われています。彼らはまるで、早暁から夕闇に到るまで、奴隷的で屈辱的で薄汚くて非人間的でしかも屡々健康に極めて有害で病気になりそうな無数の仕事――社会のエコノミー（social oeconomy）故に多くの気の毒な人々が不可避的に運命づけられている仕事――をしているのと同じように、有益に使われているのです。もしも、事物の自然の成り行き（the natural course of things）を妨げたり、また、奇妙に操られているこれら不幸な民衆の労働が廻す循環の大輪（the great wheel of circulation）をどの程度にもせよ妨げたりすることが、世の中にとって有害でさえなければ、私は、修道院の静寂な休息を荒々しく乱すよりは、彼ら民衆を悲惨な勤労から強制してでも救出する方に限りなく傾くでしょう。…ともあれ、この［土地の余剰生産物の］分配という目的のためであれば、修道士の無駄な出費も、我々世俗の不労

33）スミスの「見えざる手」を彷彿させる一文。

34）*WSB*, IX, p.125（バーク［1957］251-2ページ）.

人間の無為な出費と同程度には、旨く目的に適っていると私には思われるのです[35]。

ここでバークは、革命政府が教会（修道士）を攻撃したために連鎖の一部分に欠損が生じてしまい、全体の秩序が崩壊してしまったことを、強い憤りをもって告発している[36]。注目すべきは、クラムニックは指摘していないけれども、この場合の秩序が「階層秩序」としてのみならず「経済秩序」としても、しかもその「秩序」が「循環」と同一視される形で、把握されていることである。旧制度フランスにおける修道士は、その「怠惰」「無駄な出費」が民衆の勤労の駆動力として機能することによって、経済循環の重要な一部分を占めていた——次節で明らかにされるように、こうした認識はマルサスに継承される——のに、革命政府の暴力が修道士を除去したために循環が断ち切られてしまい、それが現在のフランスの経済的苦境の一因となっている、というのがバークのフランス革命批判の経済学的根拠なのである。このような彼のフランス革命批判の経済分析が、人為的介入を嫌悪し「事物の自然の成り行き」を賞賛する点において、彼の主唱する経済的自由主義と親和性を持つのことは明白である。

また、ここで用いられている‘social oeconomy’という表現と‘the natural course of things’という表現との関連にも注目したい。我々は両者から「自然のエコノミー（economy of nature）」という表現を連想する。この表現は、ダーウィン『種の起源』に頻出する「自然のエコノミーにおける場所（places in economy of nature）」という表現によって有名であるが、もともとは1658年にイングランドのディグビー卿（Sir Kenelm Digby, 1603-65）が初めて用いたとされ、リンネの論文『自然のエコノミー』（1749）によって普及した。当時「エコノミー」という言葉は、現在と同じ「経済」「倹約」という意味のほかに、「神の摂理」「（生命プロセスの）合理性」という意味でも用いられており——両者には「無駄のなさ」という共通の含意がある——、この論文の題名のエコノミーは後者の意味である[37]。すべての

35）*WSB*, VIII, pp.209-10（バーク［1978］201ページ）.［　］による挿入は中澤。

36）『人間論』はボーリングブルック思想の韻文化と評されているだけあって、ボーリングブルック自身も「全体の秩序」への信仰を以下のように力強い言葉で表現している。「この地球の繊細な住民は、劇中人物（the *dramatis personae*）のように、様々な性格を持ち、各場面で様々な目的の演技を割り振られている。物質世界の様々な部分は、劇場の舞台仕掛けのように、演じる者のためではなく演技のためにこしらえてあるのだ。そして劇全体の秩序やまとまりは、もしそのいずれか一つでも変更を加えられると、駄目になってしまうであろう」（*WB*, IV, p.363）。バークはボーリングブルックをその宗教思想（理神論）ゆえに生涯にわたって嫌悪したが、その階層秩序観において両者の間にはかなりの親近性が見られる。

37）鷲津浩子は‘economy of nature’に「自然の有機的統一」（鷲津［2005］276ページ）という訳語を与えているが、的確な選択であるように思われる。

生物は相互に関連していて、一つとして不要なものがない。草食動物の産む子どもの数が多いのは、肉食動物に捕食されるからで、それによって自然の平衡が保たれている。すべては神の英知による、とリンネは説いている。この論文は欧米で広く読まれ、生態学の源流の一つとなった。ラテン語で書かれているが、1759年には英訳も出版されている[38]。バークがリンネの論文を読んだのかどうかは定かではない。しかし、「多くの気の毒な人々」が「奴隷的で屈辱的で薄汚くて非人間的でしかも屡々健康に極めて有害で病気になりそうな無数の仕事」に従事することを「不可避的に運命づけられている」ことが「有益」であり‘social oeconomy’であるとするバークの叙述からは、社会体の合目的性を自然体の合目的性に重ね合わせて捉えようとする有機体的な社会観が明瞭に抽出できる[39]。

それでは、このようなバークの有機体的な社会観は、彼が『穀物不足に関する思索と詳論』で唱えた穀物取引における徹底的なレッセ・フェールとどのような関係にあるのだろうか？　常識的な理解では、経済的自由主義は産業・商業資本家などの新興階層の形成を促すとされ、「存在の連鎖」が前提とする固定的・静的な階層秩序と相容れないように見える。こうした矛盾はいかにして解消されうるのか？　実は、厳密に言えば、バークが擁護に努めた階層秩序はまったく静的・固定的なものではない。他ならぬバーク自身が中層階級の出身であり、自助努力によって上層階級に入っていった。別稿[40]ですでに論じたことであるが、バークが理想とする政治家像――彼はそれを「本性上の貴族階級（natural aristocracy）」と呼ぶ――の内容を仔細に検討すれば、彼が有能な中層階級と無能な貴族階級との間での緩やかな移動（前者の上昇と後者の没落）を認めていたことがわかる（図2）。彼は、単なる行商人からも金融階級（債券保有者）からも区別されたものとしての裕福な商工業者を、「鋭敏かつ強靭な理解力を持ち、勤勉、礼節、誠実、規律といった徳を所有し、交換的正義を尊重する慣習を身につけたことが、その成功から推察される」[41]として賞賛し、「本性上の貴族階級」へと上昇転化しうると考えている。しかし、土地所有者と比べると商工業者は私人化への誘惑に屈しやすいため、実際に上昇できるのはごく少数にとどまり、階層秩序の安定性を損なうまでには至らない。このようなわけで経済的自由主義と階層秩序の安定性は矛盾しない、とバークは考えている。

38）以上、荒俣［1982］198-9ページ、松永［1992］131ページ、松永［2000］50ページ。

39）注目すべきは、ここでバークが自然体との類比で論じているのは社会体の合目的性であって、政治体の合目的性ではない、ということである。バークは政治体から区別された自律的領域としての社会を認識している。政治体を自然体との類比で理解しようとする方法であれば、ウィリアム・ペティの『アイルランドの政治的解剖』をはじめ、バーク以前にも多くの例が知られる。伊藤［2006］を参照のこと。

40）中澤［2006b］。

41）*FR*, p.168（バーク［2000］663ページ）.

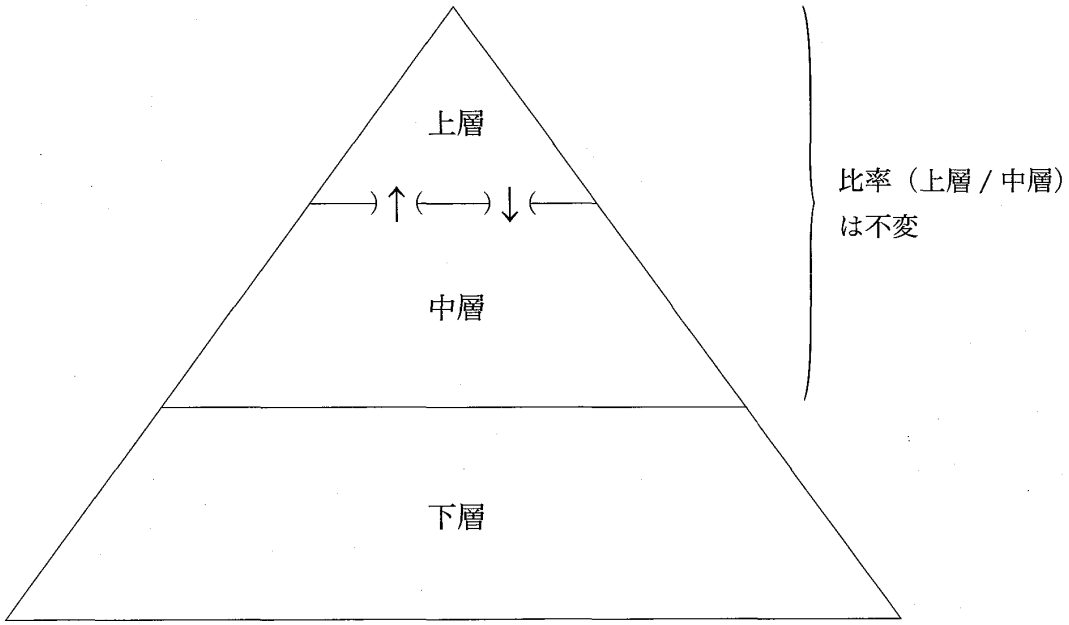

図 2

本節での議論をまとめよう。バークの経済思想は、その徹底したレッセ・フェールの主唱においては自由主義的だが――‘the natural course of things’という表現はヒュームやスミスを彷彿とさせる――、修道士といった封建勢力をその経済的機能において――経済循環の駆動力として――擁護する保守的側面も有していた。バークは、「存在の連鎖」の観念図式の枠内に留まりながらも、その図式内に資本や勤労や消費といった経済学的語彙を流入させ定位させることによって、経済的自由主義と政治的保守主義とを結合したのである。本稿ではそうしたその思想の総体を「保守的自由主義」と呼ぶことにしたい[42)]。

Ⅲ　マルサスにおける階層秩序と経済循環

マルサスはバークが先鞭をつけた階層秩序の経済学的擁護論を発展的に継承した。修道士と地主との違いはあるけれども、マルサスはバークと本質的に同じロジック――経済循環の

42）本稿が「保守的啓蒙」や「目的論的保守主義」といった既存の概念を用いなかった理由を述べておく必要があるだろう。ポーコック（Pocock［1989］）は、「啓蒙」という言葉で我々が思い浮かべるものの中には、既成のエリートの世俗面での支配を強化したという意味で「保守的」と言えるような効果をもたらした側面があったことに着目して――とりわけアングリカンのキリスト教啓蒙（国教会派啓蒙）を強く意識して――、「保守的啓蒙」という概念を提出した。しかしそれは宗教上の狂信主義をどう扱うかという問題を概念の中核に据えている。「作法（マナーズ）を生んだ啓蒙」としての側面も意識している点において、経済思想の発展を決して視野の外に置いているわけではないが、経済的自由主義それ自体への関心は希薄である。半澤孝麿（半澤［2003］第 4 章）の「目的論的保守主義」概念は、経済的自由主義への関心を本質的に欠いている。本稿の主たる関心は、経済的自由主義と政治的保守主義との結合の構造を明らかにすることにあるので、「保守的啓蒙」「目的論的保守主義」という概念の使用は適切ではないように思われた。以上の理由から本稿では「保守的自由主義」という概念を新たに使用することにしたい。

駆動力としての有閑階級［修道士／地主］の奢侈的消費――を採用している。経済学者としてのマルサスの主著『経済学原理』（1820）によれば、生産力を高める原因は、資本の蓄積、土壌の肥沃度、労働を節約する発明などであるが、生産力の発展に比例して富が継続的に創造されていくためには、生産を刺激する高い市場価格（および利潤）を実現させるような、適切な有効需要が存在しなければならない。バークの言葉を借用するならば、資本家に継続的な資本蓄積を「指示する原理」としての有効需要者が存在しなければならない。生産物の市場価値を高める需要側の要因としては、土地財産の分割[43]、国内商業と外国貿易[44]などがあるが、マルサスがもっとも重視するのは地主の不生産的消費である。

> 社会の通常の状態においては、親方生産者や資本家は、たとえ必要な範囲内で消費の能力は持っているであろうが、その意志を持たないことがわかったのである。そして彼らの労働者については、彼らはその意志を持っているとしても、その能力を持っていないことを認めなければならない[45]。

> 生産階級が経験によって知られるよりもはるかにより多くを消費するものと仮定することなしには、特に彼らが彼らの資本に追加するために収入からすみやかな貯蓄を行ないつつあるときには、莫大な生産力をもつ国は不生産的消費者の集団を持つことが絶対に必要である[46]。

その「不生産的消費者の集団」の中では「疑いなく地主が先頭に立っている」[47]。マルサスは、高地代［＝地主の利益］を国の富と力の指標と見なしたし[48]、穀物法による穀物の高価格が地主にもたらす地代こそ工業製品に対する有効需要になるとして穀物法を擁護した。バークが修道士を経済循環の駆動力という経済的機能において擁護したのと同様に、マルサスもまた地主を経済循環の駆動力として擁護した。

また、バークは、「多くの気の毒な人々」が「早暁から夕闇に到るまで、奴隷的で屈辱的で薄汚くて非人間的でしかも屢々健康に極めて有害で病気になりそうな無数の仕事」に従事

43）*PPE*, I, ch.VII, sec.VII（マルサス［1968］下、272ページ以下）.
44）*PPE*, I, ch.VII, sec.VIII（マルサス［1968］下、286ページ以下）.
45）*PPP*, I, p.471（マルサス［1968］下、336ページ）.
46）*PPP*, I, p.463（マルサス［1968］下、326ページ）.
47）*PPE*, I, p.466, 475（マルサス［1968］下、329、341ページ）.
48）農業上の改良が進んでいる文明国ほど地代は増大するから「地主の利益ほど国家の富および力と密接かつ必然的に関連しているものはない」（*PPE*, I, p.225（マルサス［1968］上、333ページ））。

することを神によって）不可避的に運命づけられている」と考えたが、マルサスも貧しい労働階級が神の定めた自然法則（人口法則）ゆえに不可避に存在すると考えている。「野蛮状態をすぎた社会なら、どこにでも、財産家の階級と労働者の階級とがなくてはならない」[49]とマルサスは断言している。彼は後者の前者への従属の不可避性を、「存在の階梯」――「存在の連鎖」のコロラリー――の比喩を用いて以下のように表現している。怠惰で不用意な人々は、

> 当然の報いとして社会階梯（the scale of society）のどん底にいるのであり、もしわれわれが彼らをこの位置から引き上げるならば、われわれは慈悲の目的を明らかに損なうだけでなく、彼らの上に位置している人々に対して紛れもない不正[50]を働いたことになる[51]。

このようにバークとマルサスの階層秩序観はかなりの親近性を示している。しかし、両者の間には無視できない差異もまた存在する。マルサスにおいて「存在の連鎖」の観念図式はバークにおいてほど明瞭に検出できない。マルサスの描く階層秩序は動物・植物・無生物を欠いており、「存在の連鎖」の観念図式としては相当に不完全なものである。また、それ以上に重要なのは、マルサスが擁護に努める階層秩序がバークのそれと比べるとはるかに流動的であることである。それが端的に表されているのが、マルサスの中層階級肥大化論[52]である。彼の中層階級肥大化への展望は、デビュー作である『人口論』初版（1798）においても、晩年に刊行された『人口論』最終版である第6版（1826）においても、本質的に変わっていない。

> 我々は、社会から富裕や貧困を除去することをおそらく期待できないが、そういう極端な層にある人々の数を減らし、中層にある人々の数を増やすような統治様式を発見できるならば、それを採用するのは、当然に我々の義務である。といっても、樫の場合でも根や葉を著しく小さくすれば幹の栄養の循環が弱くなる恐れが多くなるのと同じく、社会においても極端な層をある程度以上は減らせることはできない。なぜな

49）*WM*, I, pp.101-2（マルサス［1935］171ページ）.

50）マルサスがそれを「不正」と見なすのは、臣民の特定の階級の利益を、他の階級の利益を促進するだけの目的で侵害するからである。マルサスの念頭にあるのは、救貧法のような大規模な公的慈善である。中澤［2003a］［2003b］を参照のこと。

51）*EPP*, II, p.162（マルサス［1985］608-9ページ）.

52）柳田［1998］が最初に最初に参照されるべき有力な先行研究である。

らば、中層の溌剌たる努力が、そのために減退するからであり、それこそが知識の発達にとって一番に大切な原因であるからである。もしも、人間に、社会における上昇への希望や下落への恐怖がないならば、もしも勤勉であっても報いがなく、怠けていても罰がないならば、中層は確かに今ある状態と違っているだろう[53]。

初版で以上のように述べるマルサスは第6版でも次のように述べている。

社会の中層は、有徳で勤勉な習慣によって、またあらゆる種類の才能の発達にとってもっとも有利であることが一般に知られている。しかし、すべての人々が中層に属しえないことは明白である。上層と下層が道理上は絶対に必要であるし、また必要であるだけでなく、いちじるしく有益でもある。もし何人も社会において栄達することを望みえず、あるいは零落する心配もないならば、もし勤勉がその報酬を、そして怠惰がその懲罰をもたらさないならば、今日一般的繁栄の原動力をなしているわれわれの境遇改善への盛んな活動を見ることは期待できないであろう。しかしヨーロッパ諸国を考えてみると、われわれは上層、中層および下層の総体的割合にきわめて大きな相違のあることに気づく。そしてこうした相違の結果から見て、人間社会の大多数の幸福を増進するもっとも根拠の確かな期待は、中層の総体的割合が高まる見通しにかかっている。…もしも社会の最下層階級（the lowest classes）がこのようにして減少し、中層階級（the middle classes）が増加するならば…社会の幸福の総計は明らかに増大するだろう[54]。

境遇改善の努力の結果、勤労の美徳を身につけた下層階級は、中層階級へと上昇転化する。その結果として社会の幸福の総計は増大する（図3）。苦痛、不安、死の恐怖といった現世の罪悪――それらは神の定めた自然法則（人口法則）によってもたらされる――こそが、未来への希望の源となって、人々を境遇改善の努力へと駆り立てる、とマルサスは考えている。

生活資料の困難から生じる困窮が人間に対して加える不断の圧力の考察から結論される人生観は、人間が地上における完成可能性について合理的に抱くことのできる期待がほとんどないことを示すことによって、彼の希望を強く未来に向けさせるように

53）*WM*, I, pp.128-9（マルサス［1935］209-10ページ）.
54）*EPP*, II, pp.194-5（マルサス［1985］644ページ）.

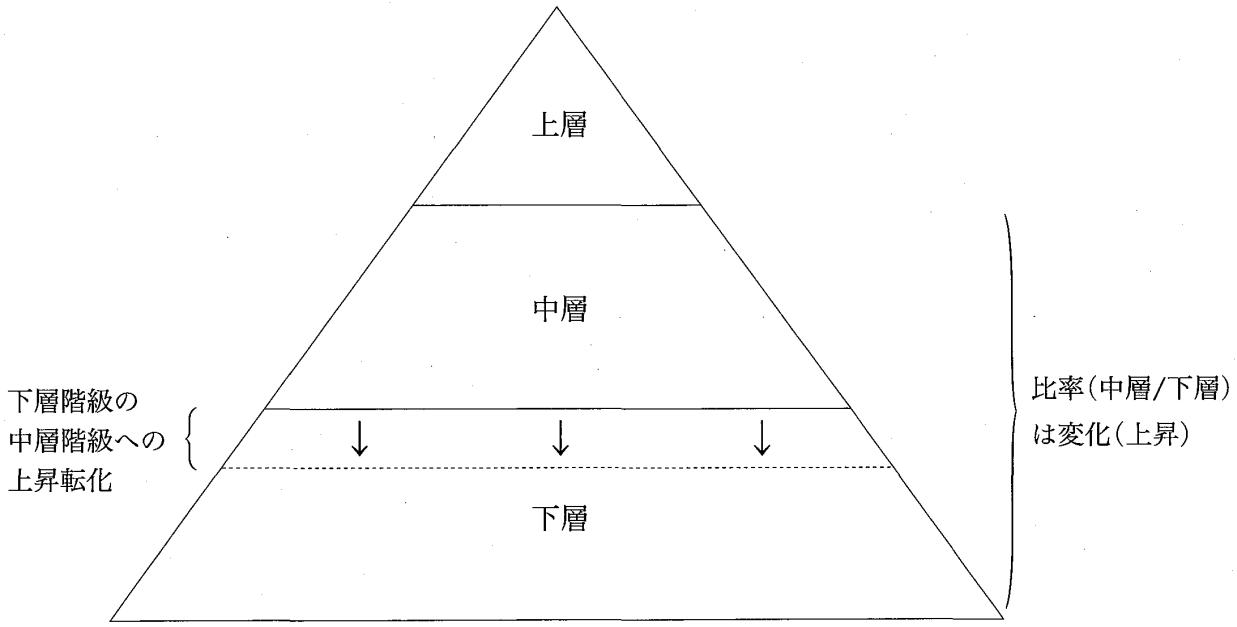

図 3

思われる[55]。

だからこそ、マルサスは「**希望は湧き出る、永遠に人間の胸のなかに。人間は今祝福されずとも、必ず将来祝福されることになっている**」という一節をポープ『人間論』から引用したのだ。現世の罪悪が神の定めた自然法則（人口法則）によってもたらされる以上、まさしくそこに神の叡智が認められねばならない。『人間論』からの引用の直後には、マルサスのそうした楽天主義あるいは神義（弁神）論をはっきりと示す以下のような件が続く。

> 罪悪がこの世に存在するのは、人を失望させるためではなく、活動させるためである。我々はそれに忍従すべきではなく、それを避けることに努めるべきである。身にふりかかる罪悪を自分のみならず自分の力の及ぶ範囲から掃いのける努力をすることが、すべての個人の利益であり、義務でもあり、彼がこの義務を遂行し、ますます賢明にこの努力を傾け、ますますこの努力が成功するならば、それだけ彼は自己の精神を啓発し向上させることができるであろうし、またそれだけ完全に創造者の意思を実行していることになるであろう[56]。

全体の完全さ（善）は局部的な不完全さ（不幸）を必要とする。局部的な不完全（不幸）は自然法則（人口法則）に基づいており、その法則を定めたのが神である以上、富者と貧者

55）*WM*, I, p.122（マルサス［1935］200ページ）.
56）*WM*, I, p.137（マルサス［1935］223ページ）.

という階層区分もまた究極的には神が定めたものである。したがって、貧富の格差を完全に消滅させることは不可能であるし、それを期待するのは神の意思に反している。ラヴジョイによれば、このような楽天主義（予定調和）あるいは神義（弁神）論は、「存在の連鎖」の宇宙観の18世紀形態の典型的表現である[57]。しかし、マルサスは富者と貧者の階層区分をもはや固定的に捉えておらず、社会の最下層階級の人々を減らし中層階級を増加させるような政策――ただし経済循環の駆動力としての地主階級の没落は阻止されねばならない――の発見と採用を、神に対する「我々の義務」だと考えている。宇宙内での人間の地位の劣等性・卑小性を忘れて人間以上のものに自らを高めよう（天使や神に近づこう）とする努力は神の目的に反する反逆行為であるが[58]、神によって与えられた属性（可能性）をできるだけ実現しようとする努力は神の意志に適っている。したがって、神は階層区分の漸進的な流動化を望んでいる、と考えてよい。漸進的な中層階級の肥大化は神の偉大な計画の実現である。ここには（かつては固定的に捉えられていた）階層区分が時間の経過とともに流動化していくという思想が明確に打ち出されている。この点こそがバークの階層秩序観とマルサスのそれとの間の最も重要な差異なのである[59]。

57）Lovejoy［1936］lecture 7. ヴォルテールは「存在の連鎖」を――かつてその観念に魅了されたことを告白しているけれども――「御伽噺」「詭弁」として退けた（ヴォルテール［1988］98-100ページ）。このことと、『カンディード』における楽天主義への痛烈な批判は、同じコインの表と裏として理解されるべきである。

58）それゆえ、そのような努力は神の罰を招くことになる。「我々は、遭遇しなければならない諸困難の性質、範囲および規模について完全な知識および正確な理解なしに進むならば、あるいは成功の望みを持ちえない対象に我々の努力を愚かにも向けるならば、無駄な努力で力を消耗し、そして我々の希望の頂上からいつまでも同じ距離をおいて隔たっているだけでなく、このシジウォスの岩の反転によって永久に粉砕されてしまうであろう」（*WM*, I, p.121（マルサス［1935］198ページ））。

59）H・T・ディキンスン（Dickinson［1977］）によれば、1760年代以降のブリテンの党派は、多様なウィッグ集団からなり、もはやトーリ党なるものは存在していなかった。すべての政治家は本質的にウィッグであった。しかし、そのウィッグ党はフランス革命勃発を機にフォックス（Charles James Fox, 1749-1806）を中心とする親仏・改革派とバークを中心とする反仏・保守派とに分裂した。1794年7月、後者が首相小ピット（William Pitt the Younger, 1759-1806）率いる与党へ合流――この与党は後に「トーリ」と呼ばれることになるが、バークやピットの反革命の主張は、君主への無抵抗を唱え国王大権を擁護する旧式のトーリ思想の復活ではなく、あくまで自由を愛し専制を嫌悪するウィッグ思想に根ざしており、ボーリングブルックが率いた旧トーリ党とは思想的系譜においても人的系譜においてまったく別ものである――した結果、議会では圧倒的勢力を擁する与党と勢力を激減させた野党フォックス派ウィッグとが対峙するに至った。この保守派対改革派の構図は以後数十年にわたって維持され、19世紀半ばに確立する二大政党制の萌芽となった。保守的な要素を削減したウィッグ党は、自由主義的な改革の党としての性格をいっそう鮮明にしたけれども、本質的には地主貴族的な政治家の集団であり、その改革的性格は一定の保守性と両立するものであった。本稿で明らかにされたように、マルサスの階層秩序観とバークのそれとを比べた場合、マルサスのほうが階層の流動性が高く、既存の身分秩序の維持という意味での保守性が低いのだが、この事実は私が別稿（中澤［2003a］）で明らかにした「マルサスの政治的帰属＝フォックス派ウィッグ」説を補強していることになる。

このようなマルサスの流動的な階層秩序観の歴史的背景をラヴジョイの記述に即して探るならば、「存在の連鎖」の観念図式が18世紀から19世紀にかけて被ったとされる変容――時間化――を指摘することができる。もともと無時間的で静的な秩序を表現していた「存在の連鎖」の観念図式は、種と種のあいだの無数の「欠けている環」というアポリアを克服しようとする過程で、啓蒙時代の「進歩」「発展」の思想の影響を受けて、歴史の中で順次実現されていくものへと修正された。「存在の連鎖は、今見るところでは完全ではないが、もし我々が過去、現在、未来にわたって、形態の全系列を知ることができたとすれば、完全であると、またはより完全になる傾向がある」[60] というわけだ。秩序の種を蒔いたのは神だが、その発芽には時間がかかる。時間を通じて神の計画が実現される。これが「存在の連鎖」の「時間化」であるが、マルサスはこの観念を以下のようにはっきりと表明している。

> いかに全能でも、偉大な創造者にとってさえ、その崇高な目的に適うような高い質の精神を持った人間を作るためには、一定の過程が必要であり、また一定の時間（少なくとも我々には時間と思われるもの）も必要である、と我々は結論すべきではないのか？[61]

「時間化」された「存在の連鎖」の観念図式に従って、生物の多様性も静的にではなく動的に解釈されるようになる。しかし、この萌芽的な進化論は、生物進化を枝分かれ的な性質のものであるとするダーウィン（Charles Robert Darwin, 1809-82）の進化モデルとは根本的に異なる、自然界の調和的展開に関する思弁的で目的論的な説明であった。ダーウィニズムにおいては、一つの枝が他の枝よりすぐれているという含みはない。ダーウィンにとっての進化は目的をもたない偶然のプロセスである。しかし、このような考え方は、目的論的な発展のメカニズムを信奉するヴィクトリア時代の人々の目には、すべてを偶然へと還元してしまう道徳観念を欠いたもの、キリスト教と矛盾するものとして映った。スペンサー（Herbert Spencer, 1820-1903）がダーウィニズムにラマルク（Jean-Baptiste Pierre Antoine de Monet, Chevalier de Lamarck, 1744-1829）的な解釈をほどこしたことで――ラマルクの学説によれば、生物は内在する力によって自ずからより複雑で高等なものへと時間をかけて変化するが、その経路はすべての時空間で同じであって、その意味で、生物の進化の過程は直線的・目的論的である――、ようやくヴィクトリア時代の人々はダーウィニズムを受容することが

60）Lovejoy［1936］p.255（邦訳271ページ）. 存在の連鎖の時間化については、半澤［2003］36-7ページ、鷲津［2005］165-93ページも見よ。

61）*WM*, I, p.122（マルサス［1973］202ページ）.（　）はマルサスによる挿入。

できた。ダーウィニズムの非目的論的な本質が十全に広く認識されたのは、ようやく20世紀の初めになってであった[62]。このように「存在の連鎖」の観念図式は、近代進化論（ダーウィニズム）の形成母体としての側面を有しながらも、その普及を強力に拒む先行パラダイムでもあった[63]。したがって、時間の経過（富の累進的増進）とともに、下層階級の一部は、自身の境遇を改善したいという意欲に突き動かされて、一定の熟練と勤労を体得するようになり、中層階級へと上昇転化し、結果的に中層階級が肥大化してゆく、というマルサスのヴィジョンは、彼らに境遇改善への意欲をもたらしているのが神の法則たる人口法則であることを考慮すれば、ラマルク流の目的論的進化論のヴィジョンと本質的に同じ論理構造を持っていることになる。マルサスの有効需要論（階層秩序の経済学的擁護論）のみならず、その中層階級肥大化論もまた、疑いなく、「存在の連鎖」の観念図式のコロラリーなのである。

本節での議論をまとめよう。マルサスは、そのフランス革命批判によって、反啓蒙あるいは保守の陣営に帰属させられることが多かった。それは決して誤りではない。しかし、同時に彼の中層階級肥大化論は、下位の存在は努力によって上位の存在へと昇ることができる、という啓蒙主義的・進歩主義的なヴィジョンを含んでもいた。マルサスがスミスの開明的な経済思想から多くを学んだことは確かであるが[64]、彼の開明的な中層階級肥大化論の思想的源泉はスミスではなく「存在の連鎖」の観念図式に求められるべきだろう。そして、マルサスの――バークとはやや趣きの異なるという意味での――独自の保守的自由主義は、時間化された「存在の連鎖」の観念図式の影響下に形成されたものとして理解されるべきだろう。以上のようにひとまず結論できるのではないだろうか。

62）松永［1988］第1・8章、Bowler［1989］, 池田［1997］66-82ページ。

63）「ダーウィンの進化論の特徴は、下等から高等へ直線的に進歩するという「存在の連鎖の観念」からの切断にある」（斎藤［1998］1026ページ）。日本で「進化」と言えば「エボリューション」の訳語であるが、これはもともとダーウィンではなくスペンサー（Herbert Spencer, 1820-1903）が使用して普及させた語である。「スペンサー以前にも、生物進化の意味でエボリューションを用いた例がないわけではなかったが、ごく少なかった。一般的には「トランスミューテイション（転成）」の語が用いられていた。ダーウィンは『種の起源』（1859）で「変化を伴う由来」という表現を用い、エボリューションは一度も用いていない。スペンサー哲学が広まるにつれてエボリューションの語も普及していった。ダーウィンも『種の起源』第6版（1872）では、加筆部分にエボリューションを用いている。エボリューションという語には、目標を目指して進歩する、という意味あいがからみついている。このようなやっかいな言葉が、種の「変化」を意味するものとして生物学に導入され、進化にかかわる議論を混乱させる一因になった」（松永［1987］148ページ）。

64）根岸［1997］第4章、中澤［2003b］を参照のこと。

結びにかえて

単なる保守反動から区別された政治哲学としての保守主義は、経済的自由主義や漸進的改革主義を自身の内に含んでいる。バークとマルサスを保守主義者と呼ぶことは間違いではないが、より正確には、保守的自由主義者と呼ぶべきである。「存在の連鎖」の観念図式は、18世紀を通じてその保守的含意が開明性と矛盾しない形で読み替えられることにより、両方の性質を具有するようになり、バークとマルサスの保守的自由主義の重要な想源となりえた。したがって、近代保守主義の成立を啓蒙思想への「反動」として捉えるだけでは十分でない。啓蒙思想の「末子」あるいは「一ヴァリアント」としても捉えるべきである。

最後に、より広く社会経済思想史全体の視野からこの観念図式の問題性と可能性を素描することによって、本稿の結びにかえたい。

第一に、「キリスト教経済学（Christian Political Economy）」[65] の系譜との関連に注目したい。18世紀末から19世紀前半にかけて、自然神学と経済学の調停を試みた、マルサス、ペイリー（William Paley, 1743-1805）、サムナー（John Bird Sumner, 1780-1862）、コップルストン（Edward Copleston, 1776-1849）、ホェイトリー（Richard Whately, 1787-1863）、チャーマーズ（Thomas Chalmers, 1780-1847）といった一群のアングリカン聖職者の経済学の系譜が知られている。その系譜をA・M・C・ウォーターマンは「キリスト教経済学」と名づけた。聖職者ではないバークは「キリスト教経済学」者のリストから漏れているが、彼が「存在の連鎖」の伝統を受容しつつその経済学的読み替えを試みた事実は、彼を「キリスト教経済学」の系譜の前史上に位置づけることを可能にするだろう[66]。

第二に、「キリスト教経済学」以後の「存在の連鎖」についても、検討の余地があるだろう。ウォーターマンの「キリスト教経済学」の系譜は1833年で終わっている。しかし、ヴィクトリア時代人が目的論的思考に執着していたこと、そのためにダーウィンの非目的論的な進化論の内容が正しく理解されるようになったのは20世紀に入ってからであることを考慮すれば、「存在の連鎖」は1833年以降も経済認識の基本的枠組みを人々に提供し続けたことになりはしないか？　ここで我々はマーシャル『経済学原理』の扉にライプニッツの有名な格言「自然は飛躍しない」が記されていたことを想起する。この格言はマーシャル経済学の方法論的特質の一端――「連続性」――を表している、とされている。橋本昭一によれば、「彼は進化論的発想から、あるいはドイツ観念論哲学の世界から、「連続性の原理」という概念を取り出し、みずからの経済学の標語として選んだ。これは古典派にたいする尊敬心を失

65）Waterman［1991］.

66）この点については、中澤［1997b］の注9および18で示唆しておいた。

わないままに、同時に新しい時代の課題を労働者階級の生活改善とみなし、静学的ミクロ経済学と動学的マクロ経済学とを結びつけるために彼が用意した連結環であった」[67]。この橋本の主張は、「存在の連鎖」の観念図式がマーシャル経済学に与えたインスピレーションの可能性の一端を示唆しているように思われる。ライプニッツとポープを出発点にして、経済思想としての「存在の連鎖」の概念史を、《バーク－マルサス－マーシャル》という系譜でたどることも可能だろう[68]。そのことによって、《マルサス－ケインズ》の系譜の相対化も図られるだろう。

第三に、「古来の国制」や「時効」の教義に代表されるコモン・ローの伝統と「存在の連鎖」との関連についても検討の余地があるだろう。ジョン・バロウは『かの高貴なる政治の科学』で「バークの政治的実用主義（プラグマティズム）の根底には秩序の形而上学があり、政治的秩序は世界の秩序の小宇宙であり、それと調和していた。秩序のこうした局部的な顕現が、我々の先祖たちから遺産として伝えられたイングランドの国制であった」[69] と述べている。この「秩序の形而上学」の基礎が「存在の連鎖」の観念図式によって与えられていることは、これまでの分析からもはや明らかであるが、バークがイングランドの国制にこの上ない賞賛を与えたのは、それが長期間にわたって存続し経験という試験に合格することによって時効の認可を獲得している（と彼が考えた）からである[70]。このような時効にもとづく合法性という観念は、そのまま「存在の連鎖」の「時間化」と等置できない。本来、コモン・ローの伝統はウィッグの自由（専制批判）のイデオロギーの一部であったのに対して、「存在の連鎖」の観念図式はトーリの秩序のイデオロギーの一部であった[71]。両者の知的関連の探求は近代保守主義の本質と意義の明確化を促進してくれるはずである。

「存在の連鎖」の思想空間は問題性と可能性に満ちている。

参考文献一覧

WSB: *The Writings and Speeches of Edmund Burke*, 9 vols., Oxford U. P., 1981-.
FR: *Edmund Burke, Further Reflections on the Revolution in France*, Liberty Fund, 1992.
WM: *The Works of Thomas Robert Malthus*, 8 vols., William Pickering, 1986.
PPE: T. R. Malthus, *Principles of Political Economy*, 2 vols., Cambridge U. P., 1989.

67）橋本［1993］18ページ。

68）本稿とは研究視角を異にするが、《マルサス－マーシャル》の系譜をめぐる興味深い先行研究として、マーシャルの「生活の標準」概念をマルサスの「愉楽の標準」概念の継承と見なす柳田［1998］第9章がある。

69）Collini, Winch and Burrow［1983］pp.172-3（邦訳148ページ）。本書の概要については、中澤［2006a］を参照のこと。

70）Dickinson［1978］ch.8.

71）Dickinson［1978］ch.1, 2.

EPP: T. R. Malthus, *An Essay on the Principle of Population*, 2 vols., Cambridge U. P., 1989.
WB: The Works of Lord Bolingbroke, 4 vols., University Press of the Pacific, 2001.
PPP: Poetry and Prose of Alexander Pope, Riverside Editions, 1969.
バーク，エドマンド［1957］「穀物不足に関する思索と詳論」（永井義雄訳）、『世界大思想全集11 バーク』河出書房。
バーク，エドマンド［1969］「自然社会の擁護」（水田珠枝訳）、水田洋責任編集『世界の名著34 バーク マルサス』中央公論社。
バーク，エドマンド［1978］『フランス革命の省察』（半澤孝麿訳）みすず書房。
バーク，エドマンド［1999］『崇高と美の観念の起原』（中野好之訳）みすず書房。
バーク，エドマンド［2000］『バーク政治経済論集』（中野好之編訳）法政大学出版局。
ポウプ［1950］『人間論』（上田勤訳）岩波文庫。
マルサス［1935］『初版 人口の原理』（高野岩三郎・大内兵衛訳）岩波文庫。
マルサス［1968］『経済学原理』（小林時三郎訳）全２巻、岩波文庫。
マルサス［1985］『人口の原理〔第６版〕』（大淵寛他訳）中央大学出版部。

Bowler, Peter J.［1989］*The Invention of Progress: The Victorians and the Past,* Basil Blackwell. 岡嵜修訳『進歩の発明――ヴィクトリア時代の歴史意識――』平凡社、1995年。
Cannon, John［1994］*Samuel Johnson and the Politics of Hanoverian England,* Oxford U. P.
Collini, S., Winch, D., and Burrow, J.［1983］*That Noble Science of Politics: A study in nineteenth-century intellectual history*, Cambridge U. P. 永井義雄・坂本達哉・井上義朗訳『かの高貴なる政治の科学――19世紀知性史研究――』ミネルヴァ書房。
Dickinson, H. T.［1977］*Liberty and Property: Political Ideology in Eighteenth-Century Britain,* Holmes and Meier Publishers. 田中秀夫監訳『自由と所有――英国の自由な国制はいかにして創出されたか――』ナカニシヤ出版、2006年。
Kramnick, Isaac［1977］*The Rage of Edmund Burke: Portrait of An Ambivalent Conservative,* Basic Books.
Kramnick, Isaac［1990］*Republicanism and Bourgeois Radicalism: Political Ideology in Late Eighteenth-Century England and America,* Cornell U. P.
Lovejoy, Arthur O.［1936］*The Great Chain of Being*, Harvard U. P. 内藤健二訳『存在の大いなる連鎖』晶文社、1975年。
Macpherson, C. B.［1980］*Burke*, Oxford U. P. 谷川昌幸訳『バーク――資本主義と保守主義――』御茶の水書房、1988年。
Nisbet, Robert［1986］*Conservatism: Dream and Reality*, Open U. P. 富沢克・谷川昌幸訳『保守主義――夢と現実――』昭和堂、1990年。
Pocock, J. G. A.［1989］"Conservative Enlightenment and Democratic Revolutions: The American and French Cases in British Perspective", *Government and Opposition*, 24-1. 福田有広訳「「保守的啓蒙」の視点――英国の啓蒙と米・仏の革命――」、『思想』岩波書店、第782号、1989年。
Porter, Roy［2001］*The Enlightenment*, second edition, Palgrave. 見市雅俊訳『啓蒙主義』岩波書店、2004年。
Thomas, Keith［1983］*Man and the Natural World: Changing Attitudes in England 1500-1800*, Allen Lane. 山内昶監訳『人間と自然界――近代イギリスにおける自然観の変遷――』法政大学出版局、1989年。
Thompson, E. P.［1991］*Customs in Common,* The Merlin Press.
Tillyard, E. M. W.［1943］*The Elizabethan World Picture,* Chatto and Windus. 磯田光一・玉泉八州男・清水徹郎訳『エリザベス朝の世界像』筑摩書房、1992年。

Viner, Jacob［1972］*The Role of Providence in the Social Order: An Essay in Intellectual History,* The American Philosophical Society. 根岸隆・根岸愛子訳『キリスト教と経済思想』有斐閣、1980年。

Waterman, A. M. C.［1991］*Revolution, Economics & Religion: Christian Political Economy 1798-1833,* Cambridge U. P.

Willey, Basil［1940］*The Eighteenth Century Background: Studies on the Idea of Nature in the Thought of the Period,* Chatto and Windus. 三田博雄・松本啓・森松健介訳『十八世紀の自然思想』みすず書房、1975年。

Winch, Donald［1987］*Malthus,* Oxford U. P. 久保芳和・橋本比登志訳『マルサス』日本経済評論社、1992年。

荒俣宏［1982］『大博物学時代』工作舎。

池田清彦［1997］『さよならダーウィニズム――構造主義進化論講義――』講談社選書メチエ。

伊藤誠一郎［2006］「レトリックを超えて――初期近代イングランドにおける古典修辞学と政治算術――」、mimeo.

ヴォルテール［1988］『哲学辞典』（高橋安光訳）法政大学出版局。

音無通宏［1998］「モラル・エコノミーとポリティカル・エコノミー」、『経済学史学会年報』第36号。

勝田吉太郎［1969］「バーク――近代保守主義のイデオロギー――」、勝田吉太郎・山崎時彦編『政治思想史入門』有斐閣、第7章。

カント［1974］『啓蒙とは何か』（篠田秀雄訳）岩波文庫。

近藤和彦［1993］『民のモラル――近世イギリスの文化と社会――』山川出版社。

斎藤光［1998］「ダーウィン Charles Robert Darwin」、廣松渉他（編）『岩波 哲学・思想事典』岩波書店。

丹治愛［1994］『神を殺した男――ダーウィン革命と世紀末――』講談社選書メチエ。

中澤信彦［1996］「バーク『自然社会の擁護』再考」、『経済学雑誌』（大阪市立大学経済学会）第97巻第1号。

中澤信彦［1997a］「真の文明社会と偽の「文明社会」――初期バークの思考法――」、『経済学雑誌』（大阪市立大学経済学会）第98巻第1号。

中澤信彦［1997b］「エドマンド・バークの救貧思想――マルサス・初版『人口論』の時代――」、『マルサス学会年報』第7号。

中澤信彦［1999］「「モラル・エコノミー」とアダム・スミス研究」、『関西大学経済論集』（関西大学経済学会）第48巻第4号。

中澤信彦［2003a］「フォックス派ウィッグとしてのマルサス――初版『人口論』成立史の一断面――」、永井義雄・柳田芳伸・中澤信彦編『マルサス理論の歴史的形成』昭和堂、第4章。

中澤信彦［2003b］「初版『人口論』におけるスミス――救貧法批判の方法論的基礎――」、『関西大学経済論集』（関西大学経済学会）第53巻第2号。

中澤信彦［2006a］「『かの高貴なる政治の科学』とその後――バーク研究およびマルサス研究との関連で――」、『関西大学経済論集』（関西大学経済学会）第56巻第1号。

中澤信彦［2006b］「政治家の条件――エドマンド・バークとシヴィック・ヒューマニズム――」、田中秀夫・山脇直司編『共和主義の思想空間――シヴィック・ヒューマニズムの可能性――』名古屋大学出版会、第4章。

根岸隆［1997］『経済学の歴史〔第2版〕』東洋経済新報社。

橋本昭一［1993］「マーシャルと古典派経済学」、井上琢智・坂口正志編『マーシャルと同時代の経済学』ミネルヴァ書房、第1章。

半澤孝麿［2003］『ヨーロッパ思想史における〈政治〉の位相』岩波書店。

別冊宝島編集部（編）［1990］『進化論を愉しむ本』JICC 出版局。
松永俊男［1987］『ダーウィンをめぐる人々』朝日選書。
松永俊男［1988］『近代進化論の成り立ち――ダーウィンから現代まで――』創元社。
松永俊男［1992］『博物学の欲望――リンネと時代精神――』講談社現代新書。
水田洋［1976］『近代思想の展開』新評論。
柳田芳伸［1998］『マルサス勤労階級論の展開――近代イングランドの社会・経済の分析を通して――』昭和堂。
弓削尚子［2004］『啓蒙の世紀と文明観』山川出版社。
ロジェ，ジャック［1992］『大博物学者ビュフォン――18世紀フランスの変貌する自然観と科学・文化誌――』（ベカエール直美訳）工作舎。
鷲津浩子［2005］『時の娘たち』南雲堂。